へ13
2378
164

遠13
2378
164

之政三年

大江山酒顛童子談序

政事畧ふ云丹波の国ふ強盗あり大江山ふ上り捜其黨多赤毛と被丹朱と面ふ浸し鬼形と偽て事を妖術ふ借初次盗を色民人を苦ませ源頼光ふ和命ありて是を討しむ扶光四天王とこれふ行者の為して賀茂が栖河と伺ひ遂ふ凶賊を誅をと云云俗傳ふ田村丸が鈴鹿の鬼平の維茂が戸隠山の鬼の類皆強盗の骨長ふして自身鬼業なるを故人かりて鬼と況実の鬼ふあり次強盗ふ吊先年丹易成相寺ふ系造し宝物頼光ふ御預文とふと詳見し巻中ふ明ふ

頼光公御願書写

摂津守源朝臣
能度當国大江山為夷
賊追討蒙
勅令發向訖速祈
觀音大士之擁護所
可被抽丹誠条如件
寛仁元丁巳三月十日
成相寺
願徒
敬白

辰孟春　十返舎一九志　㊞

源頼光
多田満仲ム長男
剣宮代季仲女
玉折姫

坂田蓋人
時行長男
陰田公時

石工門大夫
奔連
箕田源二男
渡辺綱

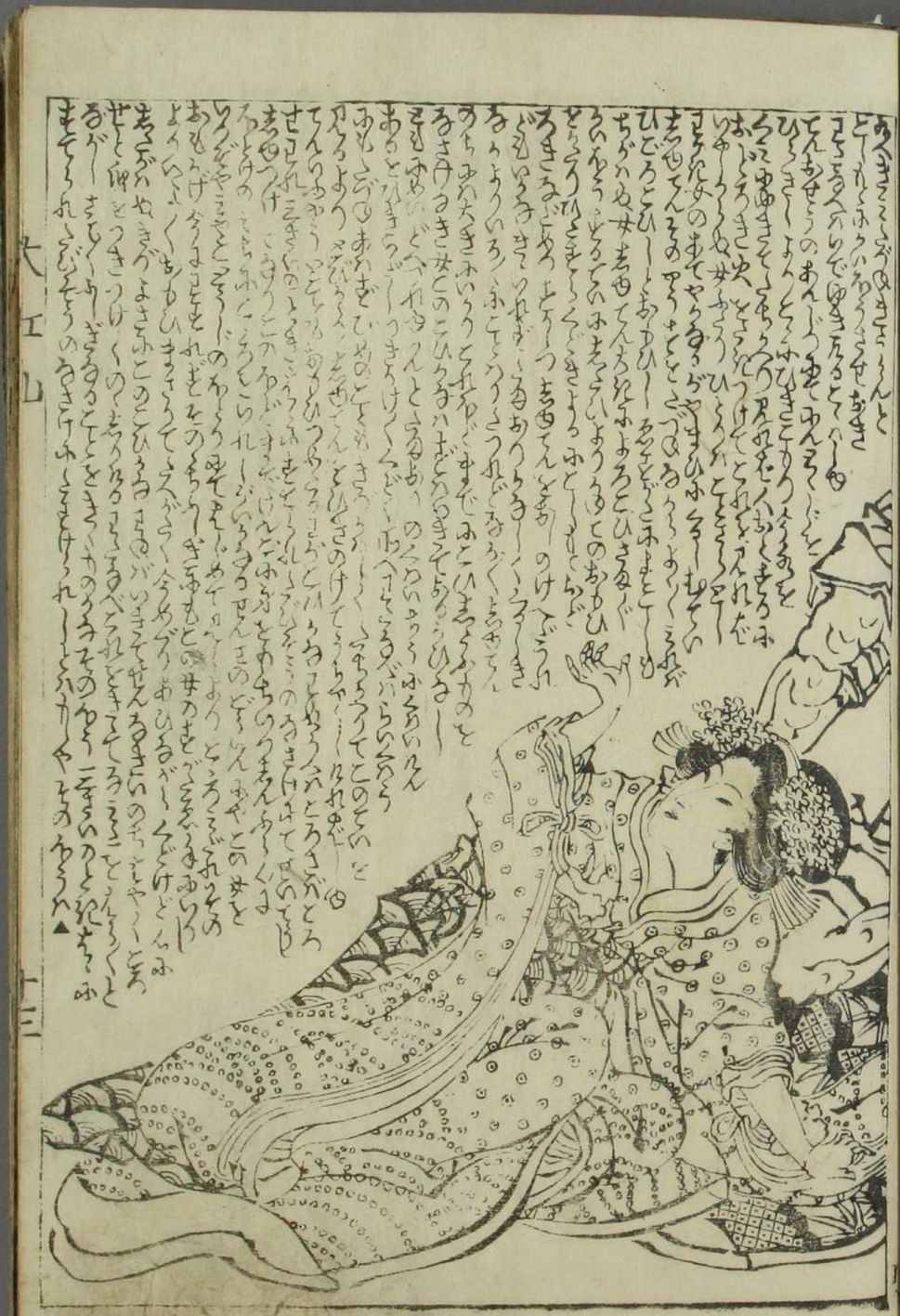
酒顛童子
五返舎

冷泉帝の安和二年左大臣高明卿ゆゑありて太宰府の権帥に左降せ
られ其党藤原の千晴罪に依して後千晴の妻左枝といふものいまだ
壮年にして力量逞く其上刀術にもくはしければ討手の多勢をきりぬけ一子
晴若を懐にして丹波の国氷上山の林下へあやうきところを遁れて年月を過ひ
しが其頃箕田の源次久といふものの武蔵の任におもむきし時残し置し
に家業を絶し故郷なる尾村といへる所に閑居してゐたる所に妻懐姙して一子
を産おとして後空しくなりけるゆへ源次久生まれの子をなほ玄月の為に千晴
妻がなげきて知己のよしみれば丹波の氷上にある事を聞出しゆへ[illegible]て頼みあき
里枝持といへる[illegible]左枝が[illegible]のちて
子晴若よりも大切にして晴若と[illegible]源次の子源三[illegible]
他よりしくしくして物領のごとくに晴若にも[illegible]源三の父源次
よりも[illegible]して左枝に[illegible]源[illegible]
玄月[illegible]安和の末ひろく山より[illegible]して山家[illegible]
せしてあり[illegible]左枝[illegible]子晴若[illegible]
せうなること[illegible]此を[illegible]の[illegible]著[illegible]

侍従
少将
中納言
中将
大納言
内大臣
参議
諸大夫
北面
左大臣
右大臣
関白
天皇

㊀あてやうるぶのつめくうちふあるとうるけひくぢうるとうくあもひてくぶをうけてのうものをてくなるうちらのうくものうあとうせてうくまつあとうるあうのうものうちうろうてくてれとうるとうるくさてれとあんまえーてらうくのをてふはうるとうれこのまるてんのうるさけまてくくのまてらのくうくうれをらのうくうまるてんのうるさけをかイどいちまのとのぐられるふまうるをとうもうれーくまるてんはあくくれのまやくーてもうとうれんくまるうれまるてんあまうのあうひまくうるやもひうるぐうとうてうれまくうぐうるあうのうとうくまてひきはひきまるくーまくもやひあれものぐりのらくうがうるヨイくるもたくくれまちちくくんの

㊁このきんこきぐまるこーてくるとらのうくうのとうるあうのうくものとうるみてうくとやうるとさてくるくうるぶまるくーまくもやひあれものぐりのらくうがうるヨイくるもたくくれまちちくくんの



辰春目録

笠亭龍澤先生著

玄同放言第二集

大本全部　一冊

第三卷ヨリ第五卷マテ開板

この編人事の二ツ同巳まで姓名の明釋ヨ起リて源頼朝の遺跡考
東光寺蒲櫻の圖説ヨ盡その間和漢の得失を論ず　野乘
俗説の謬誤を糾ヨ古書と引證して沿革来由を推ず終ル時好ハ媚
ず好事一偏の考のみあるべきもの熟讀ずバ讀史の楷梯学問の禅益ならざるの也

八文舍自笑評

三ヶ津

藝品定　役者評判記

全三冊

来ル辰正月二日より

賣出し申ス

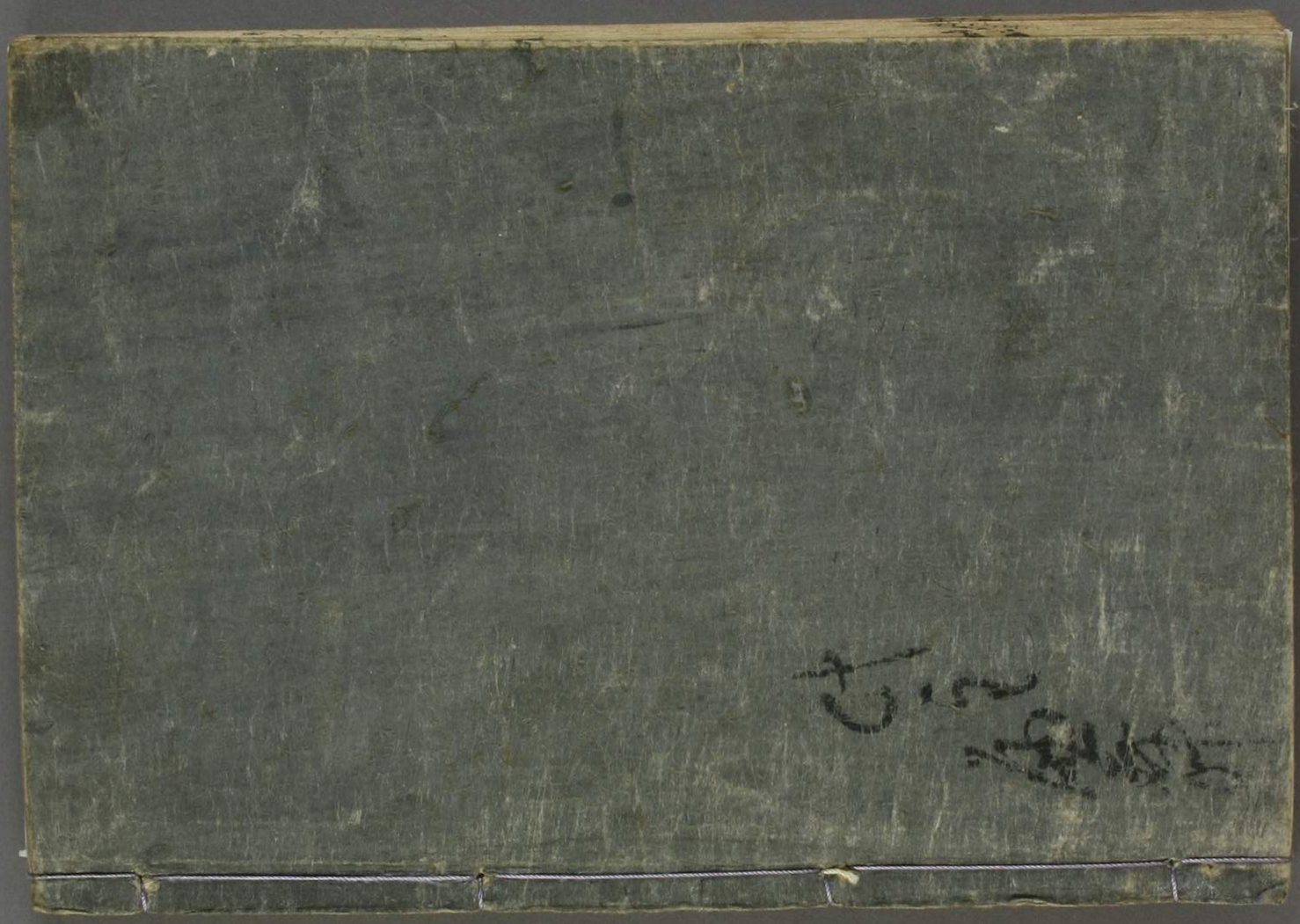
一九作
國直画
後
通油町 鶴屋喜右衛門板

ちゃく
ちゃく
ちゃく

つゞき

禁札

禁札

傳兵衛 信田妖手白猿牽	曲亭馬琴作 歌川豊國画	全六冊
大江山酒顚童子談	十返舍一九作 歌川國直画	全六冊
滑稽旅賀羅壽	同作 同画	全六冊
御誂出来合女房	同作 同画	全一冊
糖三合有封入智	同作 同画	全一冊
角力勝負附	十返舍一九作 歌川國直画	全一冊
帰咲古郷錦	同作 同画	全一冊
播州侘討稲荷来由	同作 同画	全一冊
金持評判	同作 同画	全一冊

本問屋通油町 鶴屋喜右衛門板